Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

農村跡継の都市移動と家の継承 : 軍学校進学者の「立身出世」型移動を事例として（特集 家の現在）

奥井, 亜紗子

(Citation)
社会学雑誌,26:36-51

(Issue Date)
2009-09-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011096

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011096

KOBE UNIVERSITY

農村跡継の都市移動と家の継承

――軍学校進学者の「立身出世」型移動を事例として――

奥井亜紗子
日本学術振興会

戦後日本における厖大な農村人口の都市移動は、農家の跡継不在、家の継承断絶という事態を広汎に引き起こした。農村跡継の都市移動は戦前においてもみられたものである。それは食い扶持を求めた労働力としての移動だけではなく、学歴を身につけ都市上層に参入する「立身出世」型の移動としても存在した。

本論では、戦前における農村跡継の「立身出世」型移動の一例として、軍学校進学を契機とした農村―都市移動を取り上げる。戦前において、官費制の整った軍学校は中層あるいは中の上層の子弟から積極的に志向された立身出世階梯の一つであった。本論では、農村跡継が家の継承ラインから離脱していく上でのコンフリクトを解消するうえで、軍学校進学者のメンタリティである「活私奉公」が果たした役割に着目すると同時に、「立身出世」型移動した跡継が郷里の家の継承問題にどのように対処したのか、またそこで重視される家の継承の側面とは何かについて考察する。

一　軍学校進学という転出ルート

一―一　問題の所在

産業化がもたらす移動の増大は、より多くの人々を、生まれ育った土地で先祖代々の家産・家業・社会的地位を継承しながら生涯を過ごす生活から、郷里を離れて自ら生計を確保し新たな道を拓く生活へといざなった。この農村人口の都市移動は、従来の生活単位であった家からその構成員を抜き取り、都市部に新たな生活単位としての家庭を析出するが、それは、家の継承という日本社会の基層構造を連続させる論理と根本的に抵触するものであった。とりわけ、戦後の「地すべり的」な若年層の都市移動は、次三男層のみならず跡継である長男層を巻き込んで、農家の跡継不在、家の継承断絶という状況をより広範に出現させた（並

木一九六〇：一七）。

家継承者の移動、すなわち郷里社会からの空間的離脱は、近代以降、戦前においてもみられるものである。それは産業化の進展にともなう労働力としての移動に限られたものではなく、学歴を身につけ都市上層に参入する「立身出世」型の移動としても存在した。

「立身出世」とは広義に社会的上昇移動を意味するが、竹内洋によれば、明治以降の「立身出世」（勉強立身）とは、「階層」移動と同時に上京という「地理的移動」を含むセンスである（竹内二〇〇五：一二五）。従来、「立身出世」はこの移動性のセンスゆえに、そもそも移動という「近代」的生活世界との親和性の高かった士族層等を対象とするものを除けば（安田一九七一：三九四）、概して非移動性を前提とする家の継承の論理とは抵触しない非跡継層の個人的アチーブメント、もしくは次三男層による新たな家の創設（末広型家族）といった文脈で論じられてきた（神島一九六一：二六九）。

しかし実際には、第一次大戦後に本格化した農村における教育熱は、跡継・非跡継に関わらず一定以上の階層の青年達を「立身出世」型の移動へと動機付けることになる。この移動は、生活の必要に迫られた結果ではないだけに、より一層家の論理とのコンフリクトをともなうものであったことは想像に難くない。

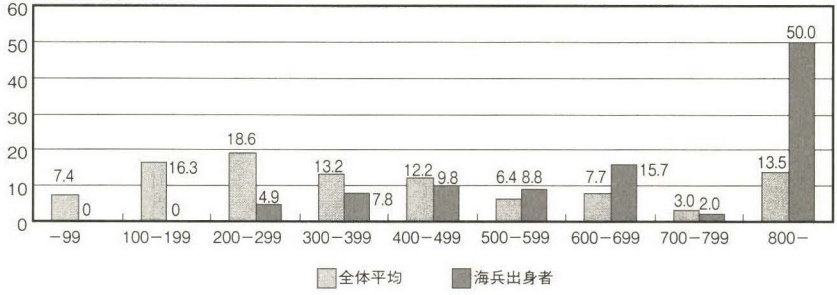
本稿では、この跡継の「立身出世」型移動の一例として軍学校進学[1]を契機とした都市転出を取り上げる。

一―二　軍学校進学と「立身出世」

はじめに、当時の社会状況における軍学校進学の独自の位置づけを確認しておこう。戦前の教育体系において、陸海軍士官学校・幼年学校は重要な立身出世階梯の一つであった。とりわけ、旧制高校―帝国大学という立身出世の「正規」ルートを進むほどには経済的余裕のない者にとって、官費制の整った軍学校は「比較的安価に立身出世できる」コースとして好まれた（広田一九九七：六〇）。河野仁が行った質問紙調査によれば、一九二二（大正一一）年以降の陸士・海兵卒業生の出身家庭は、父の職業が「文官・公務・専門自由」のうちの半分以上が一般公吏、「学校」のうち四〇％が一般教師、「農業」の多くが自作ないし自小作農であり、特に一九三九年までのグループでは三町歩未満の出身者が多かったという（河野一九八九：五八―五九）。要するに、軍学校進学は中層あるいは中の上層の子弟にとって、「社会的上昇移動のバイパス」として積極的に志向されるものであった（広田一九九七：一六三）。

彼らは戦後社会をどのように生きたのだろうか。従来の軍学校進学者をめぐる研究は、旧制高校―帝国大学という「正規」の「立身出世」ルートとの比較から、その出身階

図１　軍学校出身者の年収（%）



注：高橋三郎編（1983）p.180 表７から転載。昭和 55（1980）年 12 月時点。
注：海軍兵学校同期生会会員（101 人）と全体調査（1215 人）の平均とを比較したもの。

層や学力などに着目する傾向があったが、戦友会の結合パターンを分析した伊藤は、軍学校を縁とする学校戦友会会員が一般の部隊戦友会会員に比較して、戦後も極めて高いエリート性を維持していたことを指摘している（伊藤一九八二）[2]。図１は戦友会会員の年収をみたものであるが、全体平均に比較して海軍兵学校戦友会員の年収の高さは際立っている。また『サンデー毎日』（一九八〇年八月二四日）に掲載された名古屋幼年学校四八期生の一九八〇年時点における肩書きと学歴一覧をみたところ、約八割が国立大・私立難関大学に進学し、「経営・管理」「専門・技術」系の職業が約九割を占めていた（高橋一九八三：一七八－一七九）。

つまり彼らの多くは、敗戦によって一度は「立身出世」ルートを頓挫しつつも、あらためて進学や就職で郷里を離れ、会社を興す、あるいは大企業の経営・管理層などの地位を獲得するなどして都市上層に食い込んでいった。その意味で、彼らは、戦後一層拡大する高学歴化にともなう都市転出という「立身出世」型移動パターンの嚆矢と位置づけられよう。また、彼らが各界の指導的な地位にて戦後日本社会のあり方を陰に陽に方向付けていった経緯に鑑みても[3]、彼らの都市移動や家の継承をめぐる意識を考察することには意義があるものと思われる。

本稿は以上の問題関心にもとづき、農村跡継が家の継承責任と「立身出世」のための離村欲求のあいだをいかに生きたのかを篠山出身の軍学校進学者の事例をもとに再考するものである。まず次節では、軍学校進学者が最も鮮烈に接触したと考えられる戦前日本の家族国家観を取り上げ、そこでの先祖観を概観する。第三節では、軍学校に進学した長男二人の事例を取り上げ、軍学校進学から帰郷、再転出までの経緯と、彼らが故郷の家の継承問題にいかに対処したのかを紹介する。第四節では、事例をもとに跡継の「立身出世」型都市転出と家の継承の論理との関係について考

察する。

二　戦前日本における家族国家観

二―一　家族国家観における家と祖先

家族国家観は、一八九〇（明治二三）年の教育勅語の発布を前後に思想として芽生え、一八九八（明治三一）年に施行された家の再編・強化をはかる明治民法によって社会的な基礎が補強されたとされる（伊藤 一九八二：六―一一）。この家族国家観は、とりわけ国定第二期（明治四四）以降の修身教科書に盛り込まれ、学校教育を媒介に民衆生活のなかに徐々に浸透していった（同上、三四―三五）。

家族国家観とは、天皇と国民の関係を本家―分家関係のアナロジーとしてとらえ、天皇を「大家長」、国民をその「赤子」とするものであり（石田 一九五四）、その骨組は忠孝一体論と祖孫一体論の二つのイデオロギーによってささえられる（伊藤 一九八二：二）。この家族国家観を補強するのが日本の伝統的な祖先崇拝の観念であった。国家神道によって天皇家の神話的先祖の傘下に国民の家の先祖を収斂させることで、天皇と国民を一体化し、国家規模での先祖のヒエラルキーが形成される（藤田 一九六六：一六八）[4]。

軍学校は特に日露戦争以降精神教育を重視するようになるが、この精神教育の要である天皇制イデオロギーの核心に位置していたのが家族国家観であった。軍学校進学者は、家族国家観をより直接的に国家側から注入された者達といえる。陸軍中央幼年学校の『軍人精神訓』（一九一九年）第三章「祖先ノ尊崇及ビ祭祀」では、「家族ニオケル祖先崇拝」「郷村ニオケル祖先崇拝」「皇室及ビ国家ノ祖先崇拝」の三種の祖先崇拝を丁寧に行うことこそが、「日本帝国ノ基礎の強固ナル所以モ主トシテ此ノ点ニ基ケルモノナリト謂フベシ」としており（広田 一九九七：一八二）、家―村―国家の祖先が連続的に捉えられている様子がうかがえる。

二―二　家の幻想性

先祖の子孫への守護、保護は先祖の「おかげ」への報恩意識を育むものであるが、本来これは、子孫の生活保障のための、実体としての家の創設、および維持・繁栄させてきたことに対する恩であるべきものであった（同上：一一）。しかし、明治政府の行った政策は、民法上の家を国民掌握の単位として制定し祖先祭祀の重要性を訴える一方で、実体としての家――生活保障の単位としての家――の崩壊に拍車をかけることとなった。廃藩置県や土地永代売買禁止令解禁・地券の交付といった一連の政策は、幕藩体制下における家の「世襲」を解体し、資本主義社会に適合的なバラバラの「個人」を作り出した（鹿野 一九八三：

二九－三四）。とりわけ、明治二〇年代に資本主義が本格化していくなかでの農村地主層の都市移住の増大と、それがもたらす「家殺し（ドミサイド）」に対する危機意識は、一方で家制度に対する幻想性を想起させ、その幻想性は、結果的にイデオロギーとしての家族国家観の確立を促すことになる（色川 一九七〇：三〇九－三一五）。

以上のように、家族国家観には〔一〕理念としての家と祖先崇拝の称揚、その一方で、〔二〕実体としての家の崩壊、の二つの側面が指摘されている。このイデオロギーレベルにおける矛盾を念頭に、次節以降は事例をあげて具体的に考察していこう。

三　事例分析

三―一　調査対象者の出身地と調査の方法

本稿では、明治以降終戦にいたるまで軍都として名を馳せた兵庫県篠山市（旧多紀郡）からの都市転出者を事例として取り上げる。

篠山の軍国的風土の起点は、旧藩主青山忠誠による教育振興にさかのぼる。一八七三（明治六）年に家督を相続した青山忠誠は、自ら陸軍士官学校を卒業し数少ない華族出身の将校となった人物である（天野編 一九九一：三一）。彼は、「尽忠報国」を目的に旧藩士子弟の教育にも力を注ぎ、その一環として一八七六（明治九）年、篠山に中年学舎（後の旧制中学鳳鳴義塾―現在の篠山鳳鳴高校）を設立するとともに、東京赤坂の邸宅内に篠山出身者のための学生寮「尚志館」を建設して、篠山出身エリート層の出世ルート確立に多大な役割を果した[5]。「国家に有用なる人物を育成」するという青山忠誠の方針により輩出された篠山出身エリート軍人には本郷房太郎陸軍大将をはじめ、満州事変時関東軍司令官であった本庄繁陸軍大将など、錚々たる顔ぶれが並ぶ。彼らは、戦前篠山の城下町近辺あるいは周辺農村から鳳鳴義塾に進学した優秀な少年たちにとって、「立身出世」のモデルとして圧倒的な求心力を有した[6]。つまり篠山には、職業軍人として「立身出世」し郷里を離れるということに対するポジティブなイメージが明治期以来育まれてきたといえよう。

調査は篠山地域の同郷団体である多紀郷友会[7]の協力のもと、二〇〇四－二〇〇五年にかけて元軍学校進学者会員五名に対してインタビュー形式にて行った。本稿では紙幅の都合上、上述五名のうち跡継の立場にあった二名の軍学校進学者の事例を取り上げる。事例の代表性という点では少なからぬ限界はあるものの、戦後六〇年を経た現在において軍学校進学者を量的に把握することは非常に困難であるため、その限界を踏まえたうえで事例分析に移ることとする。

三―二　軍学校進学、敗戦、都市定着の経緯
――二人の軍学校進学者の事例から

はじめに、現存する軍学校出の郷友会員二名へのインタビュー調査をもとに、彼らの軍学校進学、敗戦、都市転出にいたるまでを概括する。

【事例一―①】N・T　一九二四（大正一三）年生
大手商社元副社長

Nは旧多紀郡丹南町に六人きょうだいの長男として生まれた。近世のN家は篠山藩西北の関所に近かったことから、関所勤務の役人に居宅を提供し苗字帯刀も許された旧家であったが、明治維新後零落し一町二反程の小規模地主となる。婿養子であるNの父親は鳳鳴義塾卒業後、御影師範学校を出て教職についており、村の田畑は小作に出していた。Nは父親の仕事の都合上、幼稚園の頃から城下町部で生活するようになった。父親の出身村が歩兵第七〇連隊の駐屯地だったことも影響したのか、Nは幼少の頃から日露戦争時の篠山出身将校の勝ち戦話をよく聞かされた記憶があり、「髭の少将さん」として有名であった古川岩太郎陸軍少将の写真が家に飾られていたという。

一九四二（昭和一七）年早春、Nは鳳鳴中学在学中に陸軍士官学校に合格して東京に転出し、陸軍少尉として終戦を迎える。敗戦後、不作地主であったN家は農地改革で田畑を取られそうになったが、「父祖伝来の土地を取り上げられるのはいやだなと思った」Nは、自分で田んぼを作ることを決意した。百姓経験のない町育ちのNにとって農業は難しく、一年目は殆ど収穫を上げられなかった。戦後一回目の大学入試は募集を知らずに過ぎてしまったため、神戸の大学に設置された旧陸海軍の軍人のための特別講座を受講し、一年後の一九四七（昭和二二）年、当時まだ旧制だった神戸経済大学経済学部に進学する。Nの学資は百姓を続けて先祖の土地を守るという条件で父親の月給から出してもらい、農繁期週二日、農閑期週四日というように単位の取り方を工夫して、農業に従事しつつ神戸まで通学していた。

一九五〇（昭和二五）年、公職追放令下で大学院進学を断念したNは、教授の紹介で商社に就職して大阪に転出した。一九五三（昭和二八）年には支店立ち上げのためニューヨークに転勤になり、その後世界各地を飛び回る生活をして、最終的には副社長まで出世している。

Nは一九五一（昭和二六）年に家族の紹介で兵庫県但馬地方出身の女性と見合結婚をしている。妻は薬科大学出身で結婚後もしばらく製薬会社に勤めていたが、後に家庭に入り専業主婦となった。一九五八（昭和三三）年に長男、一九六一（昭和三六）年に長女をもうけ、東京で居を構えている。

【事例二―①】H・S　一九二七（昭和二）年生
京都在住　建築家（設計事務所経営）

Hは旧多紀郡F村に六人きょうだいの長男として生まれた。実家は旧国鉄園篠線F駅前の魚屋と農業（一反程度）の第二種兼業農家である。一九四〇（昭和一四）年に鳳鳴に入学するが、一九四二（昭和一七）年に東京陸軍航空学校に合格し入校した。長男であるHの軍学校進学に際して、母親からは思い留まるように説得されるが、父親からは「ふるさとのため、行って来い」と全面的に認められたという。東京陸軍航空学校で一年間教養課程を終えた後に移った上級校の熊谷陸軍航学校における当時の校長は、篠山のシンボル本郷房太郎大将の息子であった。一九四四（昭和一九）年一〇月以降は激撃隊として東京上空にてB29と対戦した。戦局が悪化するなか、Hは小指の先を刀で切り血書を記して特攻隊に志願したが、出撃前に終戦を迎える。

郷里の鳳鳴中学四年生に復学し、「頭が真っ白で、茫然自失」状態で半年を過ごしたHは、卒業後、一九四六（昭和二一）年に大阪の工業専門学校に入学する。東京上空から焼け野原になった都市を見たことが、戦後建築関係の仕事に進むきっかけとなった。一九四九（昭和二四）年に新制度の学制が始まったため、二回生で入学し専門課程を履修し直し大卒となった。一九五二（昭和二七）年に卒業し二年間助手として大学の研究室に残った後、東京の大手設計事務所に就職し、東京丸の内のオフィスに勤務する。まもなく大阪支店勤務となるが、一九五八（昭和三三）年に大阪で設計事務所を構え独立し、以後二〇〇二（平成一四）年に一線を退くまで、日本建築家協会の役員等を務めてきた。

Hは一九五六（昭和三一）年に仕事関係者の紹介で見合結婚しており、妻は専業主婦、娘を一人もうけて京都に居を構えている。

事例一と事例二はどちらも長男であったが、家継承責任者であるということが軍学校に進学するにあたっての障害とはなっていない。Nは幼少時から少将の写真が掲げられた家で育つ、またHは篠山出身将校が校長を勤める軍学校に入るなど、軍人への道は地域の軍国的風土のなかですでに築かれた確たる「立身出世」の転出ルートであった。そしてひとたびこのルートに乗った彼らは、敗戦後一度は失意の帰郷をしつつも、早々に大学進学へと進路を切り替え、学歴を身につけて都市へと転出していくのである。

三―三　郷里の家の継承をめぐって

それでは、一方で、彼らは郷里に残した家をどのように処理したのだろうか。

【事例一―②】

Nにとって、郷里で農業に従事しつつ神戸の大学に通った終戦後はかなり辛い時代であったようである。不作地主であったN家が土地の取り上げを恐れて帰農した事に関して「『あそこは町人のくせに百姓する』ゆうて、誰も協力してくれなかった」ことも、「こんなところおったって何も出来ない」という「閉塞感」を高める一因となった。Nの就職転出後は両親が小作を頼みつつ細々と農業をしており、「僕はもう飛び出しちゃったから、後は些かでもお金で面倒みようという感じ」だったという。

Nは長男であったものの、商社就職後ニューヨーク勤務をふり出しに「インドで六ヶ月おったり、ポルトガルで四ヶ月おったり、アメリカ八年半などね、まあ、色んなところ……大きな港のある国の大半は行ってます」というように海外を飛び回る生活をしており、両親には「給料の一部を送って、誤魔化しとった」という状態で、跡継としては当てにされていなかったようである。

一〇歳ほど歳の離れた二人の弟は新制となった鳳鳴高校を卒業している。彼らはその後、当時篠山にあった兵庫県立農科大学（後の神戸大学農学部）を卒業し、別々の製糖会社に就職して一度はどちらも転出した。しかし、下の弟がバイクの事故で怪我をしたことを機に退職して帰郷し、その後教員免許を取得して兵庫県下の小学校教諭となっている。

大阪万博の一九七〇（昭和四五）年、郷里の父親が死亡したことを契機に末弟が正式に家を継承することになった。Nは他のきょうだい全員と共に母親の目前で相続放棄を誓うが、その時彼は末弟に①母親の面倒をみること、②お寺（仏と墓）の面倒をみること、③きょうだいが帰った時には快く受け入れること、という三つの条件を出したという。

Nは七〇歳になった頃、東京都川崎市の公園墓地の一区画を自身のお墓として購入している。息子は東京在住だが、Nと同様商社勤務で海外赴任の多い生活をしているため、結婚して川崎市に住む娘が墓参りする際の便宜を考えて墓地を選んだという。

N家では、息子全員が一度は就職にともなって都市へ転出したものの、「事故」により帰郷した末弟が結局は家を継ぐ形で丸くおさまっている。このように長男であるかどうかに関わらず、男兄弟のうち不運の事故や病気、就職先の倒産といった想定外の出来事が起こった者が郷里に戻り

家や農業を継ぎつつ通勤圏内で再就職する、というパターンは、他のインタビューでもたびたび遭遇した。それは、中層以上の農家の子弟が高学歴化して転出した場合でも、家がいざという時のセーフティネットとして一定の機能を有していることを意味している。ただし、ここでのセーフティネットはあくまでも「帰る場所」としてのものであり、家業である農業が経済的な意味で生活を保障するものではない。彼らはあくまでも、学校教師や公務員など兼業の勤め先を確保してはじめて、郷里にて生活しうるのである。

一方、事例二のH家はそのような不測の事態が起こらなかった事例である。

【事例二―②】

三人の弟を持つ長男のHは、「弟が多いのだから、軍隊に行って自分くらいが亡くなっても家は大丈夫」と考えていたというが、三男と四男が昭和一七―一八年にかけて相次いで病死したのちも、郷里にとどまろうという考えは無かった。これには、兼業の魚屋が父親の代から始めたものでさほど継承を期待されなかったこと、また成績優秀だったHを郷里にとどめる意識は父親自身にも希薄だったことが背景にはあるようだ。終戦後、米の高騰する時期にHの父親は「これ（米の高騰）は一時的な現象で、百姓は百姓」だから「百姓以外で生計を立てるようなやり方をしないと駄目だよ」とHに言い聞かせている。

だが一方でH家では、唯一残ったHの二つ下の次弟には家を継がせようと、篠山に残らせる目的で農業高校に進学させている。しかし次弟は卒業後二年ほどは篠山にとどまったものの、「情けない話なんですが、『兄貴が外に出てるんだからわしも出て行く』ということで」、Hと同じ大学を卒業して建設関係の仕事に就き大阪に転出してしまった。そのため、結果的に篠山の家はHが一括相続することになった。

現在Hは京都市内で夫婦二人暮らしをしているが、空き家となった篠山の実家に一週間に一度は帰って田の耕作を続けている。

H夫妻には娘が一人しかいない。「家を絶やすっていうのはいけないので」Hは娘の結婚の際に、婿と娘に対して、子どもを必ず二人は作ること、さらにそのうち一人はH家の跡取りとすることを結婚の条件とした。約束どおり一男一女の孫に恵まれたHは二〇〇四（平成一六）年の九月に、現在高校生の男孫を養子縁組してH姓に改名させている。

Hの事例は、家の継承を当てにしていた弟が、予想に反して都市転出してしまったケースである。ここでHは自分の孫を養子縁組することによって、H家の継承を守るのである。

四　考察

本節では、前節までの事例紹介から〔一〕跡継の都市転出パターンとしての「立身出世」型移動モデルと〔二〕継承される家について、具体的に考察していこう。

四―一　跡継の都市転出…「立身出世」型移動モデル

従来、農家の跡継に学歴はいらないという風潮が一般的とされてきたが、事例はいずれも長男である。天野によれば、篠山地域では、全部の家ではないという注釈つきではあるものの、大正末～昭和初期生れから農家の長男も中等教育に行く傾向が出現した。長男は家を継ぐものという考え方はまだ支配的だったにも関わらず、他方で、出生順位に関わりなく「できる」子には上の学校に行かせようとする風潮が出現する（天野編 一九九四：一九九―二〇一）。特に戦前の篠山において、鳳鳴中学に進学するのはクラスでも数人の成績優秀者だけの特権であり「頭が良ければ義塾」というのは一つの「ステイタス」であったという。

しかし、鳳鳴中学までは進学させても、それ以上の高等学歴をつけさせる段になると根強い壁が存在した。戦後新制高校となった鳳鳴を卒業した昭和七（一九三二）年生まれの郷友会員の話では、大学に進学する長男の同級生の転出を思い止まらせようと、その父親が駅の構内まで説得に来たという。こうしたエピソードにみられるように、学歴主義の浸透、それに伴う都市転出と跡継の家継承責任には長期におよぶ相応の相克があったことも事実である。

跡継層を含めた若年層の農村流出は、都市部における就業機会の増大と関連づけて論じられることが一般的であるが、彼らを都市転出に向かわせたエネルギーの深淵には、単純に食い扶持としての就職先を求めるだけではない、離村そのものを求める感情があったことは確かである。

> とにかく、なんか狭いところでこちゃこちゃしていたくないという気持ちやら、……（篠山は）寒くって霧が多くて、快適じゃないですよ。……だから、ちょっと頭の働く人だったら、こんなところ、よりも、どこか外に出て行きたいという気持ちがあったんじゃないかな。（事例一N）

そして、戦前の軍学校進学という転出ルートは、時代的な雰囲気の後押しとあいまって、跡継の転出をも止むを得ないと思わせるだけの説得力を持つものであった。いわばそれは、「お国のため」の名目のもとに、「立身出世」志向を内面化した中層農家の跡継を継承ラインから抜き取る嚆矢となったのである。

家を継ぐとかそんなことは何も考えてなかったですよ。もうとにかく、兵隊さんになって、将校になって馬に乗って、末は、少将か中将か大将かなんて言ってねえ、やっぱり、夢見るような、雰囲気だったわけですよね、篠山っていうのはね。（事例一N）

ただし、この「立身出世」志向は、ともに一九四二（昭和一七）年に軍学校に進学した事例一と事例二の間でも少し異なった彩を帯びる。「末は少将か中将か大将か」という具体的な職業軍人としての出世イメージを描いて士官学校に入学したNと比較して、一五歳で航空学校に入学したHの行き着くイメージは特攻隊であった。東京上空で「何のために私は、米軍と砲火を交えなければならないんだろうと、まあ、真剣に考えました」というHは、その答えを、家族国家観にみられる抽象的な理念としての家に見出すのである。

戦争中、一口に天皇陛下のためと言うけれど、意識下の意識として、それは、私の場合ふるさとであり、F村であり篠山であり。人間としては両親であり。それを統括しているのが、天皇陛下だと、そういう認識なんです。そして、それが家なんです。（事例二H）

しかし、広田照幸がするどく指摘するように、この一見矛盾するようにみえる家や村という共同体への個の埋没（無私の献身／滅私奉公）と「立身出世」（私的目的達成）は、実際には対立するものではなく、むしろ予定調和した「活私奉公」だったのもまた事実である（広田 一九九六：三九九）。それは、「家のために戦った」という跡継のHが戦後再び都市転出していく経緯にもあらわれていよう。

敗戦後、軍人エリートへの道が頓挫した後も、彼らの外へと向かう意識、および学歴を介した「立身出世」意欲は消失しなかった。事例一では篠山で農業をしつつ神戸まで四年間通学する、あるいは事例二では教育制度改革により「最高学府」である大卒資格を得るために二年間延長して学校に残るなど、激動する時代にもまれて相応の苦労をしながら学歴獲得のために奮闘してきた様子がうかがえる。ある軍学校出身者（昭和四年生、二人兄弟の長男、海軍兵学校一年目で終戦、飲食チェーン店元社長）は、終戦後大阪府下の公立大学工学部を卒業したものの、「やっぱり会社の経営者っていうのは経済出身が多い」ことに気づき小学校教師の傍ら国立大学の夜間経営学部に入り直したという。こうしたその後の動向からも、軍学校進学者がきわめて高い上昇志向を有していたこと、そして実際に企業戦士として経営者や役員などの都市上層へとのぼりつめていった様子をみることができる。

彼らのこの高い上昇志向を下支えした動機とは何だったのだろうか。

日本が本格的に経済復興を果す時期に、商社の企業戦士として世界各国を飛び回った経験を持つNは、自身の仕事を「僕ら（日本の）ドル稼ぎのために外へ出たようなもの」と言い、またHも焼け野原になった東京の上空で建築家としての進路を決めたと言う。彼らにとって、自身が仕事に邁進し出世や成功をしていくことと、戦後日本社会を立て直していくことは同義であった。それは、彼らの意識が戦後においても「立身出世」と「お国のため」が不可分の「活私奉公」であったことを意味しているといえよう。つまり、彼らは家族国家観にみる家―村―国家の連続的観念のなか、家に対する継承責任を国家への責任へと読み替えることで、都市上層へと流入していったのである。

四―二　継承される家とは何か

次に、「立身出世」型移動をした農村跡継にとっての郷里の家の問題を考えてみよう。

「家を継ぐとかそんなことは何も考えていなかった」とは言うものの、それは「立身出世」型の移動者にとって家はもはや重要なものではないということを意味しない。ただし、彼らにとって家は当然継承されるべきものではあるものの、そこに長男である彼らが継ぐ、という発想はない。学業優秀であった彼らは鳳鳴に進んだ段階ですでに「外に出るべきだというような、義務感みたいなものが」あったという。だが、一方で彼らは、後に残る次三男に対しては、代わりの跡継として篠山に残ることを強く希望していたのである。事例一は首尾よく三男が家を継ぐ形でおさまったが、事例二では家を継がせる予定で農業高校に進ませた次男が転出し空き家となってしまったため、孫の一人を養子縁組して姓を変更させることによって、郷里のH家の継承を実現している。

ではそこで継承されるべき家とはどのようなものであろうか。ここでは継承に相応の努力をしたHの事例をもとに考察を進めてみよう。

養子縁組をしてからのHは、H家の姓を継いだ孫と一緒に墓参りを行うようにしている。Nが相続放棄をする際に提示した三条件の一つにもみられるように、お墓を守るという行為は家の継承のもっとも可視的な部分であるといってよい。では、それ以外の家の内実とは何であろうか。

Hは現在も週に一度は自宅から郷里の「留守宅」に戻り、田んぼに水を当て、仏壇に火をともす[8]。リタイア後も京都から居を移す意志のないHにとって、「留守宅」をこうした形で守り続けることはすなわち家を守り続けることであり、養子縁組をした孫にも守り続けることを期待している。そして、「本人（孫）も、この『田舎』も継がなければな

らないんだという、自意識は持っているようだ」という。彼にとって、家の継承とは、H家の墓（祖先祭祀）の継承とともに、「田舎」という言葉にシンボライズされる郷里の家屋敷の継承の二つの側面があるといえる。つまり、祖先祭祀さえすれば家の継承が果されるのではなく、あくまでも「郷里におけるH家」の存立根拠となる家屋敷の保持が要件として望まれるのである。

ただし、この家屋敷の継承はノスタルジックな内面的要請のみに起因するものではない。Hは両親没後、郷里の祭りの山車引きをはじめ、葬式の無常講、H家株揃っての盆前の墓掃除などで折々に帰省してきた[9]。祭りの維持費、あるいは入会権を有する共有林の日役など参加できないものに関しても相応の負担金を払い続けている。また、田の耕作を続けることは「先祖から預かった者の使命」であるが、収穫に対する関心はきわめて薄く家業や家産といった意味合いは弱い。それでも高齢の体をおして通いで耕作を続けるのは、田を荒れさせて「近所に迷惑」をかけないように「やるのが当たり前だから」である。家屋敷の継承は村のメンバーシップとしての義務の継承をも意味するのである[10]。

こうした語りからは、現代の農村社会学において家の実体として重視されてきた家業や家産――生活保障の単位としての家――の重要性が減じたとしても、まだ家の継承は望まれるということ、それが祖先祭祀という宗教的行為への傾斜を強めながらも、未だ「田舎」という土地からは完全に解放されないものであることが明らかになる。

五　結びに代えて

本稿では、戦前における農村跡継の「立身出世」型移動として、軍学校進学という都市転出パターンを取り上げ、彼らの移動や家の継承をめぐる意識について分析してきた。

近代以降の家は、ご先祖の「おかげ」という報恩意識の実体である家産や家業の重要性を失う過程において、逆に祖先祭祀という宗教的側面の重要性を表面化させてきた。しかし、本稿で紹介した事例からは、家業や家産の重要性を失ったとしても、家の継承は祖先祭祀という宗教面のみに収斂されて残存するものではなく、依然として家屋敷の継承を介した「田舎」という土地と、その共同体のメンバーシップとの深い結びつきを有していることがうかがわれた。

こうした家の継承と土地との緊密な結びつきは、一般に家継承者である後継の移動を阻害する要因となるものであるが、軍学校進学者のメンタリティである「活私奉公」は、農村の跡継が家継承ラインから離脱して都市に定着していく上でのコンフリクトを和らげる一定の役割を果たした。さらに彼らは、戦後もこの「活私奉公」という価値観

を維持し続けながら、戦後の都市社会復興の担い手となっていった。

最後に、彼ら軍学校進学者が戦後日本の都市家族のあり方に与えた影響について触れておきたい。彼らが都市において形成した家族はいずれも、性別役割分業が徹底した近代家族であった[11]。戦後、日本企業が積極的に従業員の家族政策を行っていくなかで、家庭における妻の「内助の功」が「銃後の守り」にたとえられてきたことはよく知られている（酒井 一九九四、木本 一九九五）。「家族の戦後体制」（落合 一九九四）を特徴づけるこうした性別役割分業の徹底は、「立身出世」型移動により都市大企業経営・役員層など各界の指導的立場に食い込んでいった軍学校進学者の戦前からの価値観の延長上でも把握することが出来るのではないだろうか。この点の検討は次回の課題としたい。

〔付記〕

本稿で扱ったデータは多紀郷友会のご協力のもと軍学校進学者の会員を御紹介いただく形で二〇〇四－二〇〇六年までに収集したものである。多紀郷友会会誌『郷友』の山口博美編集長、ならびに複数回の面接および書面での調査に応じていただいた関係者の方々には、懇切なご協力を頂いた。記して謝意を表したい。

註

（1）ここでの軍学校は、陸海軍士官学校をはじめとする現役の各種学校（陸海軍、経理、兵器、音楽学校、航空各種学校など）を広く指すものとする。

（2）江利川は、海軍兵学校の校長であった井上成美が敗戦の年にあえて「予科」を開設し全国の学業優秀な中学生を「青田刈り」したことを、「戦後復興のための人材育成を文部省に代わって海軍が行っていたようなもの」と表現している（江利川 二〇〇二）。

（3）この最も象徴的な存在としては、富山県の農家出身で陸軍士官学校卒業後大本営参謀となり、戦後は伊藤忠商事会長となって数々の賠償ビジネスに関わった瀬島龍三があげられよう（共同通信社社会部編 一九九九ほか）。

（4）孝本は、日本人の先祖観を生命の源流としての先祖を基調に、①孝・恩の道徳規範としての先祖、②災因論としての先祖、③ホトケ／タマとしての先祖、の三つの局面に分類し、家族国家観イデオロギーが血の継承（系譜的連続性）を基礎に、①の道徳規範としての先祖を強調することで社会統合をはかるものであったとする（孝本 一九九六：一一）。

（5）天野は明治から大正期にかけての鳳鳴入学者のうち四～五割は父兄職業が農業であったことを明らかにしている（天野編 一九九一：八五）。篠山地域の農民子弟は、比較的早い段階から学歴を介した旧士族層の出世ルートに参入していった。この背景には近代以降の軍国的風土のみに収斂し得ない多様な要因が考えられる。近世期譜代大名の城下町としての地域的特殊性、丹波杜氏を輩出してきた農村の豊かさと同時に、郷士と呼ばれ

る近世以前の地方豪族が家格の高い富裕農民として存在し、彼らが農民子弟の出世ルート参入の先鞭をつけた可能性も指摘しておきたい。

（6）篠山の軍国的雰囲気は、軍人養成を標榜する鳳鳴義塾内部のみにみられたものではない。明治四〇年九月の陸軍平時編成の改正にともない、篠山町に歩兵第七〇連隊が置かれたことも、当地域の軍国的雰囲気の醸成に少なからぬ影響を与えた。明治四四年生まれのある女性郷友会員は「篠山町は軍隊のラッパに明け暮れる日々であった」と大正末から昭和初期の篠山を回顧している（『郷友』一九九一年一二月一五日、三九四号）。

（7）明治二四（一八九〇）年に旧藩主青山家を中心に形成された篠山市（旧多紀郡）郷土関係者の親睦団体。上述した篠山出身エリート軍人が発起人となったこともあり、戦前の多紀郷友会は多数の将校、軍関係者が在籍する軍人志向の極めて強い団体であった。現在も当地域の伝統的進学校である鳳鳴高校（旧制中学鳳鳴義塾）出身の高学歴エリート層を母体とし、会員には東京、大阪を中心とする大都市圏在住者（転出者）と篠山市内在住者の双方を含む。会員は個人単位、会費は年三五〇〇円、入会資格は特に設けられていないが会員の紹介が必要であり、経営者や管理職など肩書き付きの会員が圧倒的に多い。現会員の年齢層は六〇代から七〇代が中心である。会の活動としては、東京、京阪神および篠山にて開かれる「郷友の集い」のほか、年三回会誌『郷友』の発行など。

（8）そのため、Hはインタビューの際に、住む者のない彼の篠山の実家を筆者が「空き家」と呼ぶことに強い抵抗感を表明し、「空き家ではなく留守宅」と何度も訂正されていた。

（9）聞き取りによれば、「無常講」は戦後も土葬の習慣が残っていた当地域の墓堀当番の呼称である。また、Hは盆前の一族そろっての墓掃除には毎年朝三時半頃に起床して篠山に出かけている。

（10）そしてその意味では、転出者にとっての家の継承は、依然として共同体すなわち村の問題でもあり続けるといえよう。村における権利・義務の主体としての家の側面については長谷川善計ほか（一九九一）参照。

（11）事例一のNは殆ど海外を飛び回ってばかりで家庭生活は省みてなかったといい、「子どもはほっといたって育つと思うんですよ、家内がしっかりしとったら。お金の心配をさせないのが一番大きいんだもんね。給与をちゃんと渡しとけば、問題は起こらないと思うんですよ」と述べている。

文献

天野郁夫、一九九一、『学歴主義の社会史――丹波篠山にみる近代教育と生活世界』有信堂高文社。

石田雄、一九五四、『明治政治思想史研究』未来社。

伊藤幹治、一九八二、『家族国家観の人類学』ミネルヴァ書房。

色川大吉、一九七〇、『明治の文化』岩波書店。

江利川春雄、二〇〇二、「戦時下の教育」『英語青年』平成十四年九月号、研究社。

落合恵美子、一九九四、『二一世紀家族へ』有斐閣選書。

鹿野政直、一九八三、『戦前・家の思想』創文社。

神島二郎、一九六一、『近代日本の精神構造』。

河野仁、一九八九、「大正・昭和期における陸海軍将校の出身階層と

地位達成――父親の職業階層の検討と昇進の規定要因分析」大阪大学人間科学部教育社会学・教育計画論研究室編『大阪大学教育社会学・教育計画論研究収録』第七号、五三―六五。
木本喜美子、一九九五、『家族・ジェンダー・企業社会』ミネルヴァ書房。
共同通信社社会部編、一九九九、『「瀬島龍三」とは何だったのか――沈黙のファイル』新潮文庫。
孝本貢、一九九六、「家族国家観の登場と先祖――先祖観の多元的把握への一試論」明治大学人文科学研究所編『明治大学人文科学研究所紀要』四〇号、二四一―二五〇。
酒井はるみ、一九九四、「日製の少子化政策」日立の現代史の会編『日立製作所と地域社会』二巻日立市郷土博物館、一九―三九。
高橋三郎編、一九八三、『共同研究・戦友会』田畑書店。
竹内洋、二〇〇五、『立身出世主義〔増補版〕――近代日本のロマンと欲望』世界思想社。
並木正吉、一九六〇、『農村は変わる』岩波新書。
長谷川善計・竹内隆夫・藤井勝・野崎敏郎『日本社会の基層構造――家・同族・村落の研究』法律文化社。
広田照幸、一九九七、『陸軍将校の教育社会史――立身出世と天皇制』（株）世織書房。
藤田省三、一九六六、『天皇制国家の支配原理』未来社。
安田三郎、一九七一、『社会移動の研究』東京大学出版会。
矢野敬一、二〇〇五、「祖先と記憶をめぐる政治と知の編成――国民道徳論と柳田国男」『浮遊する記憶』青弓社、一四―四七。